自ら求めて表現する子どもを育てる図画工作科指導

図画工作科

1．図画工作科でめざすもの――創造的心情の啓培

図画工作科の主たる目標（課題）は，創造的心情を持った人間の育成である。造形力を育てるということは，一面ではあっても，本質ではない。

創造的心情は，① 創造そのものの楽しさを味わわせる。
② 造形力（線・色・形・創意工夫）の育成
③ 良き学級風土の形成（仲間づくり）

の三者が相まって培われるものであり，それは，図画工作科の一題材一題材，一時間一時間の授業を核として育てていかねばならぬものである。授業の中で，子どもの活動をいかに支え高めていくか，追求する場の構成を中心に，本年度は研究をすすめた。

2．図画工作科でめざす子どもの姿

(1)楽しく「創造」できる子

心の解放を基底に，なによりも「創造」そのものの楽しさを感じとれるということは，すばらしいことである。子ども本来の姿の中には，造形意欲・創造的心情が満ち満ちているはずである。しかし敢えて第一のこのことをとりあげるのは，図画工作科の中で，その意欲を消し飛ばす要素が同時に存在しているからである。「表現したい。」「してみたい。」と思う前に「こうしよう。こうしなさい。」的な，子どものサイドに立った，意欲づくりがなされていない点などは，まさにこのことを指しているのではないか。表現する楽しさ，創り出す楽しさは，自然発生的であり，好奇心を伴った経験の中にもたくさん見つけられるものである。子どもらしい素直さで必ず感じとれるものであるはずなのである。しかし，この時障害となるものとして，“客観的評価”での，指導者，製作者両方から出てくる「うまい，へた」があげられる。本来自分を表現するはずであった造形活動が，その美的・技術的要素によって評価され，子どもの自然な発達に即していたはずの活動自身が拘束されていないかということである。本来楽しんでできるものを楽しんでできるようにしてやれば，いいのではないだろうか。

(2)たくましく「創る」子

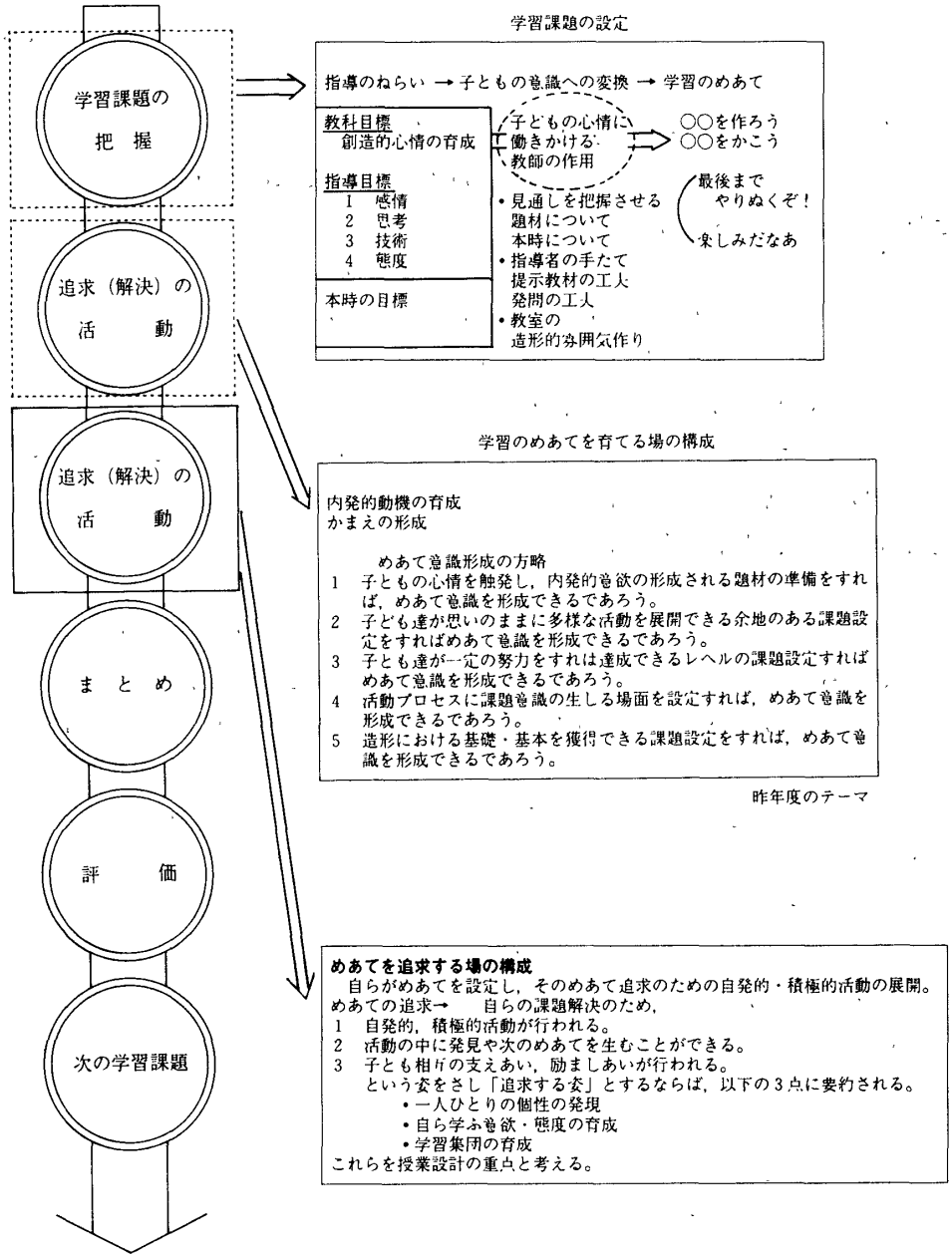
自分の考えを表現しようとしてぶつかった壁に立ち向かっていく子であってほしい。創造することは，広がっていくことであり，自らの可能性を自らが伸ばしていくことである。発達段階に即して，その子どもの造形思考に即して「多様な造形活動」が展開できる場を設定するならば，このたくましい姿勢を身につけることができ，より新たな創造に向け主体的活動を起こすのではないだろうか。

(3)やさしい子，支えあいはげましあう子

友だちの作品から多くのことを学び，自らの作品を通して，心情を耕やせるような子であってほしい。鑑賞という活動は，自他の良し悪しを問うものでなく，次からの造形活動や表現活動に，支えとなり得る学ぶ場であり，認識し質的に，進歩していくことである。友達との共同製作においては，表現と鑑賞が同時にでき，子ども一人ひとりの成長が，大きくはかれる時である。活動を通じた結びつきが生む互いの支えあいは，快よく，楽しい活動の裏付けとなろう。個の成長をはかることが，同時に他の成長も助けるという造形教育に於ける長所を生かさないわけには，いかない。技術的な造形に終わらぬためにも，図工科本来の心情の育成に相まってこのことを忘れ

てはならない。

3．図画工作科授業におけるめあて追求の基本構造



4．授業評価とよりよい授業への修正

授業の構成にあたってはまず「かきたい。作りたい。」ということ（めあての形成）と，「こうかきたい。こんなふうに作りたい。」という（めあての追求）の２点が重要な課題となる。この２点は，子どもの意識に基づいた課題であるだけに，その評価も形として表われにくいものである。子どもが自分のめあてにどれだけ近づくことができたかという結果だけでなく，追求過程の中でも評価をしていくことが重要となってくる。それとともに，その作品を通じて，教師と子ども・子どもと子どもとの“対話”が生まれるような地盤作りのための評価が必要となってくる。

そこで今年度は，作品の造形要素の分析と心情の汲み取り（低学年），個々の自己評価（高学年）のそれぞれの方法での評価を試みた。

よりよい授業づくりへの足がかりとしての評価のあり方について，今後も研究を進めていきたい。

（中神・増村）